

羅臼高校と北方領土問題

鈴木 奈美

羅臼高校との交流と知床学

私たちは、合宿の三日目に羅臼高校を訪ねた。高校は小さな丘を登ったところにあった。生徒たちはこの坂道を自転車や徒歩で通学してくるという。高校の校章は「知床半島に生息しているオジロワシが大空に飛翔する姿に校歌に託された「からだつよく、心さえざえ」の理念を指している。校訓は「知床の自然の如く厳しく 美しく 羅臼岳のごとく悠然と」である。知床という地域や自然といった環境が大きく教育にも関わっているのが、校章や校訓から見て取れる。

この羅臼高校がある羅臼町は北海道の東北端、知床半島の東側に位置し、南北に約 60 km、南北に 8 kmと細長く、総面積 397.87 平方 km 人口は 2017 年 4 月末で 5,251 人となっている。根室海峡の向こう約 25 kmに北方領土国後島を望み、「日本最後の秘境」と称される知床国立公園を擁し、雄大な自然環境のなかで野生動物と人間の生産活動が共存する稀有な地域として、2005 年 7 月に「世界遺産」に登録されている。沿岸漁業を基幹産業とする町は、知床の豊かな自然と豊かな漁業資源に恵まれ、水産の町として発展してきたが、主要魚種であるスケトウダラ、ホッケなどの資源の急速な減少に伴い、人口の減少と高齢化が進み、町の財政も悪化の一途をたどっているようだ。しかし町は持続可能な羅臼町を創造し、漁業を中心に商工業や、観光・農業の復興を図り、新しい試みを積極的に展開していこうとしているという。



生徒数は 107 名、職員数 18 名の規模の高校である。生徒のほとんどが、地元にある二つの中学校から進学しているので、私も小学校から中学校へと進学するとき、まったく同じような状況だったので想像できるが、知り合いばかりで新しみが無いというのが生徒たちの正直な感想であった。部活への加入率は約 73%と、私たちが通っていた高校と立地や生活環境などはさほど変わらないのではないだろうか。実際に出会った生徒たちもとてもきれいな制服を着た高校生といったイメージで、近くにセブンイレブンがないことを不満に思っている様子だった。

しかし、私の通っていた高校などと違うところは、この羅臼高校では、知床学を学ぶ機会が設けられているということである。主に羅臼高校では中高一貫の教育の柱として、「確かな学力の育成」「健全な心身の育成」「郷土愛・勤労観の育成」を掲げている。中でも、三つ目については知床学などを学ぶことになっている。「羅臼町知床学要綱」によれば、年々増している地球規模の気候の異常、飢餓、貧困、戦争など、これらの原因が 20 世紀以降の文明によって作られたものとし、近代教育についてもその一端を担っているものであるという。そして、「知床において知床について学ぶ知床学は、知床での暮らしを

豊かなものにするため行動を育てることを目指しているが、同時に地球規模で環境のことを考え、持続的な未来のために行動する人材の育成をも目標にする。」とある。

知床学は場の学びである。

知床の自然の中で、知床の自然環境について学びつつ、知床の自然環境のために行動する学びである。わかりやすい例として、「クマ学習」を挙げたい。知床では本当に野生動物に出会う機会が多かった。夜道で目の前に大シカが飛び出してきたときには本当に驚いたが、もっと恐ろしいクマに遭遇することもある。そんな環境で暮らす生徒たちは、安全対策として「クマ学習」をすることとなっている。しかし、もう一つ「クマ学習」をする深い狙いが存在する。それは人と自然の関係を考えるきっかけを作ることであり、知床で身近なヒグマを自然の象徴として意識することである。生徒たちはヒグマの生物学的な学習をすることによって安全対策をさらに高めるとともに、その危険さに自然に対する畏敬の念を感じることができるのだという。また、知床学ではほかにも、「生態系学習」や「郷土学習」、社会人としての体験をすることができるインターンシップや職業調べを含んだ「キャリア教育」が行われている。

このような座学やフィールドワークを介した知床学で、生徒たちは知床という自然環境や地域について持続的に触れることができる。総合的な学習の時間に実際に参加させていただいたとき、私たちは生徒たちと地域について話し合ってみた。東京という「遠く離れた土地から来た大学生」の私たちに興味津々で、短い間だったが、彼らとはとても親しくなることができた。その時、いくつか質問をしてみた。知床学について、これからの進路について、東京について、地域の未来について。知床学について聞いたとき、古典的な部分まで興味を持つ生徒は少なく、その講義の内容がどのように知床学の中で重要なものかについては興味を持っていない様子だったが、知床の現状や未来についてはきちんと自身のキャリアなども含めて考えている様子であった。

このように高校生の時期から、自分のキャリアと地域について関連付けられる高校生はどれくらいいるのだろうか。自分のことを考えてみると、高校時代は大学進学を前提にした勉強の時期であった。地域という場所と自身の大学進学を関連付けて考える場所など用意されていなかった。確かに自分で実家のある地域が今後どうなってゆくのだろう、産業は何があるのだろう、だれが地域の未来のために動いているのだろう、自分はどうすればよいのだろう——そう考えることはあったかもしれないが、それについてだれかと話し合う機会はなかった。そう考えると、高校時代から、知床学という、地域について学び、みんなで話し合う機会を得ることができるということは、彼らにとって、彼らの地域にとって、かけがえのない時間や機会であることに違いない。

しかし、彼らが実感することができるのはきっと、私のように知床学を外から見ることができる「よそもの」と出会って、その違いを共有する瞬間なのではないか。この瞬間にこそ、私たち「東京の大学生」が羅臼高校の生徒たちと会うことの意義だったと考える。異文化交流をしる、価値観が変わるから、と大学に入ると必ず誰かが言っているのを耳にするだろう。それは何も外国とだけのことではない、日本の中では異文化はたくさん存在していると私は今回の合宿で感じた。しかし、異文化であることや、自身の置かれている環境の特異性などには、自分と違う文化や環境を持つ人々と出会わなければならない。羅臼高校の生徒たちにとっても私たちとの出会いが、そのような機会になってほしいと

感じた。そしてこれは私の意見だが、彼らには知床学について学んだ後に知床学だけではなく、ほかの地域や東京などにもでて、いろんな文化や人にもっと出会って、知床学の価値について気付いてほしい。その時にもっと自分の地域やキャリアに強いこだわりや結びつきを感じることができるのではないだろうか。

北方領土について

最終日は羅臼町を後に資野付半島を經由して、野付半島ネイチャーセンターへと南に向かった。野付半島とは、延長約 26km の日本最大規模の分岐砂嘴である。正式名称は「野付崎」であり、これは 1962 年に道立自然公園に指定された。車での移動の道中に駐車スペースがあったため、車を止め湿地帯に降り立った。この湿地帯はテレビコマーシャルなどによく使われる土地で、この日は運よく向こう岸にいる鹿や鳥を見たりと北海道の非日常的で雄大な自然を感じることができた。この後、野付半島ネイチャーセンターへと向かうわけだが、進行方



野付崎 湿地帯



ネイチャーセンターから見えた国後

向左側にはずっと国後島が見えている。この国後島は、齒舞島、色丹島、択捉島からなる北方領土の一つである。国後島は根室半島と知床半島の中に位置している全長 122 km の細長い島で、沖縄本島より長い島である。野付半島からはわずか 16 km、羅臼町からは 25 km しか離れておらず、典型的な活火山であり、北方領土の中で最高峰の爺爺（ちゃちゃ）岳（1,822m）がある。材木岩やろうそく岩などの奇岩があり、温泉も 10 数か所あるそう。私は羅臼町を訪れるまで、北方領土について、社会の授業程度の知識しか持ち合わせていなかった。しかし、合宿中には海を見る先に必ず、この国後島が目に入ってくるのである。この合宿でホエールウォッチングを行った時も、ロシアとの海峡ぎりぎりまで船が進んで、「あれが、国後島だ。」とこんなにも近く、いつも見えているのに取り返すことができない歯がゆい存在として、実感させられた。北方領土についての学習は中高一貫教育の中でも、積極的に行われている。実際に中学生の作ったという資料を見ているととても分かりやすく北方領土のことを理解することができた。その中でも特に印象的だったのは、北方領土に関するアンケートだった。対象者は中学生 51 人と先生 27 人である。質問は、

1. 北方領土を変換してほしいですか。
2. 北方領土返還要求運動の取り組みを知っていますか。
3. 北方領土返還要求に参加してみたいと思いますか。

の三つである。まず、一つ目の質問に対する意見で、生徒と先生の回答の間に世代間のギ

ヤップが生まれていることである。

先生の世代「はい」66.7%、生徒の世代「はい」49.0%と、両世代とも「はい」の回答が役半数を占めた。「はい」の回答を行った先生は「日本固有の領土であり、元島民の方々の故郷であるから」、「経済資源的にも我が国にとって重要であるから」などの回答があり、生徒にも同じような意見が見られた。

「いいえ」0%・「どちらでもない」25.9%・「無回答」7.4%と回答があった。しかし、生徒側では「いいえ」25.5%・「どちらでもない」25.5%と、「いいえ」の回答が4分の一を占める結果になっている。その回答者の理由の抜粋をいくつか挙げてみると、「いいえ（生徒）」：「今のままで満足しているから」、「別にどうでもいいから」。「どちらでもない（生徒）」：「今はロシア人が住んでいるから」、「今の生活に支障はないから」、「メリットがよくわからないから」などがあった。一部、学習前の段階のためかメリットなどについては今後理解が深まっていくのではないかと思える回答もあったが、北方領土の返還に対する意欲の向上には大変困難を感じた。二つ目以降の回答についても、やはり生徒のほうでマイナスな回答が多くなる傾向があり、占領から時が経つことに対する危機感を覚えた。学校の職員の約一割が北方領土引き上げ二世であるが、生徒たちの世代となると、3代目となり、引き上げという意識はだんだんと薄れていくだろう。

北方領土問題の解決に向けた取り組みとして、「四島交流（ビザなし）事業」というものがある。この交流は、1992年から始まった日本国民と北方領土に住むロシア人住民との相互訪問による交流のことである。この交流では、相互理解と友好を深めることを目的とし、旅券（パスポート）、査証（ビザ）なしで外務大臣の発行する身分証明書などにより、特別な枠組みで渡航が認められていることから、「ビザなし交流」と呼ばれている。この交流には青少年や教育関係者を対象とした訪問事業もあり、中学生・高校生・大学生なども参加することができる。このような機会を機に、北方領土問題に関心の薄い層を返還運動に巻き込んでいくことができるのではないだろうか。

まとめ

羅臼高校での「知床学」や北方領土問題など、自分の住む土地から離れた場所で起こっている問題には私たちは無関心である。これは同じ日本で起こっていることでも、離れているから仕方がないのかもしれない。しかし、知床で起こっているような環境問題や、地域の過疎化といった問題、また北方領土問題はもしかしたら身近に起こるかもしれない。今回の合宿では、これらの問題が他人事ではなく、自分事として受け止めるための機会となった。直接的に私たちが彼らの問題に介入することができるわけではないかもしれない。しかし、今回北海道の地を訪れたことで、私と土地の間には完全な他者であるという感覚はなくなった。絆というものが生まれたのかもしれない。だから、たとえ遠くの土地で起きていることでも、自分の近くで力になれるような機会があれば、必ず力になりたいと考えている。ぜひ、羅臼へ行く機会があれば、観光だけではなくいろいろなことに目を向けてほしい。

(すずき・なみ 立教大学社会学部社会学科3年 阿部治ゼミ)